

はじめての恋ではないけれど

目 次

はじめての恋ではないけれど	5
愛の軌跡	201
Je te veux	239

はじめての恋ではないけれど

1 平凡な日常の変化

結婚式ってどんなだろう。

綺麗なドレスを着て、めいっばい可愛くお化粧をして。皆に祝福されながら、隣には大好きな夫になるべき人がいる。

(ああ……なんて幸せな図なの！)

こんなことを夢見る私は、ごく平凡なOL、相澤奈々、まもなく二十五歳。

特に難しいことを望んでいるわけじゃなくって、本当に普通の……平凡な結婚をして、幸せな家庭が築けたらいいなあって思って日々を過ごしている。

自分が大切だなと思う人や物を大切にしたい……私の願いは、そんな小さなものだ。

まあ要するに、私という人間は「平凡」の域を出ないということ。でも、その平凡さが何より心地いいと思うし、私はその世界の中でずっと生きていけるものだと思っていた。

今日は仕事が休みなので、彼氏の涼と買い物に来ている。誕生日プレゼントを買ってくれるとうので、嬉々として彼の隣に並ぶ私。

「気の利いたものが買えない」と悩んでいる涼に、「指輪が欲しい」とお願いした。

「指輪？ いいけど、俺の給料の範囲内してくれよ」

私は「当たり前でしょ！」と言って彼の手をギュッと握った。

「別に高いものが欲しいんじゃないの。なんていうか……たまには女の子らしいものが欲しいなって思ってる」

「何それ。奈々は十分女の子らしいじゃん」

お世辞じゃなく、涼は真面目な顔でそんなことを言う。

「ありがとう。そんなふうに言ってくれるの、涼だけだよ」

愛しさを込めて、彼の肩に寄りかかり、幸せをかみしめた。

そう。私の日常は決して派手ではないけれど、毎日が幸せで満ち溢れていた。大好きな涼がいて、仕事があつて、こうやってたまにお互いの記念日を祝ったりして……他に望むものなんか何もなかった。

「あー、この指輪可愛いなあ！」

アクセサリーショップで、小さなアクアマリンがちりばめられた指輪に目を奪われた。アクアマリンは三月生まれの私の誕生石でもあるし、この透明な海の色が大好き。

「え、こんな安いのでもいいの？ ダイヤとかき、そういうの選んでもいいんだぜ？」

涼は拍子抜けしたような声を出す。私がかもつと高価なものを選ぶと思込んでいたようだ。

「ダイヤも綺麗だけど、私は自分の誕生石がいいなって思ってるの」

私のためにダイヤまで考えてくれたのは嬉しかったけど、婚約指輪でもないのにそんな高価なものねだる気持ちにはなれない。

「奈々がいいなら俺は全然いいけど」

涼はそう言って店員さん呼び、私の気に入った指輪をお願いしてくれた。

「誕生日のお祝いか何かですか？」

清潔感のある礼儀正しい女性店員がこやかに私を見る。

「ええ」

「まあ、素敵。お似合いのお二人だわねって、店員同士で話してましたの」

私たちは言葉もなく照れるばかり。

「お客様の指に合わせますので、少しお時間をいただきますが、よろしいですか？」

「はい」

そっと手を出し、右手の薬指のサイズを測ってもらった。

(次に測ってもらうときは、左手の薬指になつてるといいな)

そんなことを思いつつ、隣に立つ涼をチラッと見た。

鈍感だけじゃなくおおらか、見た目は結構イケメンだから、会社でもわりと人気がある。

私は特別面食いなわけじゃないのだけど、たまたま好きになつた涼は素敵な容姿をしているから、いつかライブルが出現するかもしれないと覚悟している。

「はあ、指輪ができるのが楽しみだなあ。涼、本当にありがとう」

「奈々が欲のない彼女でこっちは助かるよ。でも、あの指輪、確かに奈々にぴったりだったな」

「でしょ？」

「うん」

店を出て歩きながら、私たちはこんな会話を交わしていた。

なんとも言えない幸せな空気が私たちを包む。

「奈々、手出して」

涼がそう言って自分の右手を出した。私は不思議に思いながらも左手を出す。

すると、涼は温かい手でそっと私の手を握り、そのまま自分のコートのポケットにズボット入れた。

「こうするとあったかいだろ？ 奈々の手って、いつも冷たいからさ」

「……」

私は照れ屋で、なかなか自分から手をつなごうとか言えない。だから涼はこうやって二人の距離を縮めるために、積極的に動いてくれる。

涼の手が冷えた私の手をじんわり温めてくれた。

「涼……好きだよ」

顔を赤くして、私はそうつぶやいたのだけど、その声は涼に届かなかつたみたいだ。

こんな感じで……私の恋は順調そのもので、何の不安も焦りも感じてはいなかった。

そんな日常にちよつとした変化が訪れたのは、指輪を買ってもらったデートの日から一週間後くらい頃だった。

休日には彼氏と楽しく過ごす私も、平日はせっせと仕事をしている。

今日は上司の樋口さんから頼まれた業務が山積み。やってもやっても終わりの見通しが立たない作業に少しげんなりしていた。

(あくお腹すいた)

私の心の声を通じたのか……お腹がぐくと鳴る前に、昼休みを知らせるチャイムが鳴った。そして社内一斉に、電気という電気が消される。仕事を続けたくても、パソコンも閉じなければいけないのだから、皆諦めたように席を立つ。

「奈々！ お昼行こうよ」

元気な声がフロアに響いた。

隣の部で働く田島未来が足取りも軽く私のほうへ寄ってくる。彼女は独特の色気とサバサバした性格が売りで、社内でも人気のある女性だ。実は私もちよつと憧れていたりする。同い年だけれど、未来のほうが大人びた雰囲気を持っていて、たいいてい彼女のほうが年上に見られる。

「待ってね、今お財布出すから」

私はそう言って、シンプルなキナリの布バッグからノーブランドのお財布を取り出した。涼はお財布も一緒に買ってあげようかと言ったけど、今ので十分満足してるから断った。

私はもともとブランド物とかにも興味がなくて、自分のスタイルとペースで生きる、のんびりした性格。長く伸びた髪を軽く横に結んでシュシュを日替わりにするくらいしかお洒落はしない。

地味というほどでもないけれど、未来のように目立つ美人でもない……それが、私。

「働いてるんだから、もうちよつと贅沢してもいいんじゃない？」

母親からもそう言われるけど、私はこういう自分に不満を持ったことは一度もなくて、それなりに楽しく幸せに生きている。

「早く行かないと定食売り切れちゃうよ。麺類は並ぶから嫌なんだよねー」

食堂へ向かう途中、未来はそう言って溜め息をついた。

この会社は、敷地内にたくさんさんの工場があって、そこで働く全員が二つしかない食堂に集まる。だから当然のように毎日十五分くらい並ばされちゃうのだ。

「売店でパンを買ってもいいけど、今日はもう少しこつりしたものが食べたいな」

私はどんカツ定食を食べたいと思っていた。朝何も食べなかったから、すぐお腹が空いている。

「やだ、太るわよ」

美容に気を配っている未来が眉をひそめるけれど、私はおかまいなし。

食べたいものを我慢してまで痩せたくない。そりゃあ……太りすぎは困るけど、私は普通の体形。特にダイエットの必要もない……と思っている。

「ま、佐々木くんはそんな奈々を好きだって言ってるんだから、いいか」

唐突に未来は、涼のことを口にした。涼は私と同じ部署にいたので、グループは違うけれど、毎日顔を合わせている。

佐々木涼、二十七歳……私にはもったいないくらい、素敵な彼氏。未来は、涼が浮気しないか時々

チェックするように私にアドバイスしてくれる。

「気をつけなよ……男なんて、いつフラツといくかわからないんだから」

「ええー……そんなことないでしょう」

このときの私は、涼が別の誰かに心を動かすなんて想像もできなかった。

付き合って一年。結婚の二文字が話題にのぼることも多くなった私たち。私としては「安定した」付き合いをしていると思っっている。

私以上にマイペースで異性のことに疎い涼が誰かにフラリ……なんて考えるだけで笑ってしまいそうになるんだけど……

「男性ってそんな簡単に浮気しちゃうものなの？」

あまり何度も言われると多少不安になる。そんな私の反応を見て、未来は慌てて否定した。

「冗談、冗談。佐々木くん超真面目だもんね、大丈夫だよ。第一さ……女性にモテてる自覚がなく、いつつもボーっとしてるから、いいキャラクターだね。一緒にいて楽でしょう」

フォロワーの意味もあるのだろう、未来は涼のキャラクターを褒めてくる。

「ま、まあ。そうかな？」

そう言われてみると確かに、涼の隣にいるのは楽ちん。特別何かを話さないといけないという空気もないし。部屋で一緒にDVDを観てたりすると、涼が居眠りをしてたりすることもあるから、多分彼も私と一緒にいるのが楽だと思ってくれてるんだろう。

「あの人、仕事以外ではそんなに熱心な趣味持ってないから。ていうか、仕事に追われて他のこと

何もできないって言ってた」

「ああ、そういう感じだよ。不器用そうだし」

未来がそう言っても特別嫌味な感じはしない。それどころか私は逆に、涼の不器用さを指摘されて吹き出してしまった。

「そうだ、涼は不器用で嘘のつけないタイプだ。そういう真っ直ぐなところが彼の魅力で、だから私も彼を好きになった。」

ただ、涼がどうして私を好きになったのか、そのあたりはいまひとつわからない。同期だけで開いた飲み会で話が合ったのがきっかけで、メール交換をするようになった。そこからは、特別お互い頑張らなくても自然に恋人の關係に移行していった。

「私、中の下くらいの女だと思ってるんだけど、涼は私でいいの？」

付き合い始めた頃、そう聞いたことがあった。涼が私を好きだというのが、なんだか信じられなかったから。

すると、涼は彼らしい口調で言った。

「奈々は中の上だ。そんなに悪くないよ」

「俺にとっては上だよ」なんて言わないで、あえて「中の上だよ」と言う。一瞬力が抜けるけれど、それも涼らしさだと思えば笑って許せる範囲だ。

「評価してくれてありがとう」

私はそのとき、確かそんなふうに言って笑顔を見せた。

未来は「奈々のその素直さと心のゆとりが最大の魅力よ」と言ってくれるけど、涼も同じように思ってくれているかはわからない。私自身でさえも、自分がどういう人間で、どんな魅力を秘めているのか……考えたことはあまりなかった。

昼休みが終わってすぐ、中途入社の子が紹介された。数日前から聞いていた、私の後輩となる子だ。年齢は二十歳。

「江藤マユリです。アルバイト以外で仕事をするのは初めてなので、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが……どうぞよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる仕草がなんとも可愛らしい。顔立ちは幼くて、少し危なっかしいというか、頼りない雰囲気漂わせていた。

だけど若いわりに、人前での挨拶に慣れている感じ。「守ってあげたい」とか「力になりたい」と思わせる可愛さを持った子だな、と思った。くつきりとした大きな瞳と、それをさらに強調するような長い睫毛。その睫毛効果で彼女の魅力は倍増している感じ。おまけに、少し内股になった脚が、彼女をより幼く、可愛らしく見せていた。

「相澤さんが話しやすいだろう。いろいろ教えてやってくれ」

上司の樋口さんが私に向かってそう言った。

この樋口恵介という上司は、いつもムスツツとしていて、どうも対応しづらい。

「はい。江藤さん、相澤です……どうぞよろしく」

すぐに返事をしないと「応答が遅い！」と注意されるから、私はかしまった状態ですぐに挨拶をした。

「よろしくお願いします！ 良かった、優しくそうな方が先輩で」

そう言ってマユリはニコリと笑った。

（お人形さんみたい。可愛いなあ）

私は五つも年下のマユリに好感を持った。なんといつても、可愛いのだ。

「なんでも聞いてね。遠慮しなくていいから」

「はい。わからないことだらけなので、よろしくお願いします」

感じのいい口調、首を少しかしげる女の子らしい仕草。私は「素直そうだし……うまくやっていけそう」と思い、まるで妹ができたような気がして嬉しかった。

この女性がいずれ私の心に暗い影を落とすなど、このときは全く予想できなかった。

実際、私はマユリとうまくやっていた。

女が多くなると、とかくトラブルが起こりがちなんだけど、私とマユリはキャラクターの違いが明らかだったせいか、お互いの足りない部分を補い合っていた。

少なくとも私はそう思っていて、マユリが困っていると喜んで手助けしていた。

「相澤先輩がいないと私、何もできませんよ……先輩、パソコンに詳しくて凄いですね！」

「江藤さんだって覚えが早いし、すごく丁寧に仕事するから安心」

私もマユリを褒める。とはいってもマユリの仕事が完璧なわけではなく、多少ミスのある書類は先輩として私がフォローしていた。

仕事はそれほど難しくない。でも、マユリはどこかしらうっかりミスをしていたりする。

(まあ、あとでまとめて注意すればいいか)

そう思っ、私は彼女のフォローを続けていた。

そんなある日の昼食時、未来が意外なことを告げてきた。

未来は隣の部署で事務をしていて、私と仕事で直接関わることはない。だからマユリと接する機会だってそれほど多いはずがないのに、未来はマユリと少し接しただけで違和感を覚えたという。

「あの子、ちょっと調子いいよね」

「調子がいい？」

驚く私に、マユリのちよつとした「癖」みたいなものを語り始めた。

「だってさー……私のウェスト見て『モデルみたい！ 細いですよね』とか言うんだよ。私……正直胸は自慢だけど、ウェストはそれほど細くないのよ。軽くコンプレックスなのに……あんなふうに言われると逆に傷つくっていうか」

めずらしく未来が自分の体型を卑下するようなことを言った。

未来はかなりパーフェクトボディで……言われなければウェストにコンプレックスがあるなんて全くわからない。

「いいじゃない、実際モデルみたいに綺麗なんだしさ」

フォローを入れたけれど、未来はそれでも渋い顔をしている。

「うーん……奈々がそう言ってくれると素直に嬉しいけど。江藤さんに言われると、あまり嬉しくない。あの子のほうが細いから私が勝手に落ち込んでるだけなのかもしれないけどさ」

そう言ったとき、未来は黙り込んだ。切り替えが早いタイプだから、次に会うときにはまた元気な彼女に戻っているだろうけど……私は未来が感じた、なんとなく傷つく、というのがよくわからない。

確かにマユリは細くて小さくて、本当に誰が見ても「か弱そうだな」「守ってやらなければ」と思っ、てしまっ、いような雰囲気の子で……同性の私ですらマユリのことを心配して、いつも気にかけてしまっ、う。

そんな私は、マユリが持つ本当の……「恐るべき引力」には、気付かなかった。

マユリが会社に入っ、て三か月が過ぎた。

彼女もかなり仕事をこなせるようになってきて、私が口出ししなくても、自らできる仕事を探したりしていた。それでもまだ小さなミスはあるから、それは私がフォローをした。ミスを注意してマユリとの関係が壊れるのが少し怖かったのもある。

そんなとき、たまたま私が忙しすぎて手が回らなかつ、た仕事を、涼とマユリが二人で進めることになつ、た。

(ああ……涼と一緒に仕事するチャンスだったのに。もう！樋口さんが私一人じゃ到底まかないきれない仕事を次々まわしてくるせいよ!!)

疲れもあって、私の怒りの矛先は樋口さんに向いた。

樋口さんは口数こそ少ないけれど、仕事には相当手厳しい。相手が女でも若くても、妥協や甘えを許さない。

「泣くのは家に帰ってからにしろ。今は勤務中だ」

涙をにじませても全く動揺の色を見せずに、訂正の指示がギッシリ書き込まれた書類を机にドサツと置いていってしまう。

そういう人だ。

三十歳、独身。外見は若く見えるけど、何せ仕事に厳しいこともあって……誰も樋口さんに碎けた調子で接することができない。

そんな怖い人に向かって、私は初めて仕事量について文句を言った。

「一人でこの量をこなすのは無理ですよ」

「……君の能力を買って頼んでるんだが」

樋口さんは涼しい顔をして言った。

「私、そんなに優秀な社員じゃありません」

そう言うと、彼は何故かフツと笑った。

「何がおかしいんですか！」

「上司に向かって、仕事できません……なんて言う社員がいるとは思わなかった」

馬鹿にされたような気がして、私は口をつぐんだ。

「まあ、相澤さんを頼りにしてるのは確かなんだ。俺も手伝えることは手伝うから、そこは遠慮なく言ってくればいい」

「……はい」

こんなわけで、私の仕事量は以前と変わらず。涼と一緒に仕事をするチャンスを奪われ……若干悲しくなったけど、こればかりはしょうがない。

そんな感じで仕事を頑張っていたけれど、そのうちマユリが時々、涼について愚痴をこぼすようになった。

「はあ……あの仕事けっこう大変」

化粧室でメイク直しをしていたマユリが、軽く溜め息をついた。

「量が多くて大変なの？」

そう尋ねると、マユリは首を横に振った。

「ううん。なんか……佐々木さんって全然話さないから。正直、やりにくい」

うちの会社は社内恋愛禁止を掲げている。だから、私と涼が付き合っていると知っている人もごくわずか……当然マユリはまだ私たちの関係を知らない。だから、マユリがいくら涼の悪口を言っても、私はマユリサイドに立ってコメントをしなくてはならない。

「ごめんね、私も手伝えたらいいんだけど……今、樋口さんから頼まれた仕事が忙しくて」

涼の不器用さや、気が利くとは言えないところを知っている私としては、マユリが仕事のことでも、マユリはすぐには、いつものニッコリスマイルに戻る。

「大丈夫、わからないところは頑張つて佐々木さんに聞きましょう……奈々ちゃんは今の仕事を頑張つて」つやつやの唇を軽くティッシュで押さえながら、マユリはそう言った。「先輩」と呼ぶのは堅苦しいからと、マユリは私を「奈々ちゃん」と呼ぶようになっていく。親しく接してもらえるのが嬉しくて、私もマユリのことを「マユちゃん」と呼ぶようになっていく。

「そう……？」

「うん、ありがとう。奈々ちゃんがいるから頑張れるよ」

「マユちゃん、つらいことがあつたらなんでも言つてね。可能な限り力になるから」

「うん。奈々ちゃんがいるから、職場は好きだよ。でもさ……まあ、また今度話すね」

なんとなくモジモジした様子で、マユリが俯いた。その瞬間、私の胸がズキリと痛んだ。

マユリが顔を曇らせると、私の心も軽く痛むのだ。何故かはわからないけれど、マユリのこととは体を張つても守つてあげたいと思つてしまつて……私の中のこの感情は何なんだろうと自分でも不思議だつた。

変な言い方になるけど、今の私はマユリに「惚れている」状態に近い。

マユリが笑つていればそれだけで嬉しいし、「奈々ちゃん！」と言つて頼つてくれると、なんでも言うことを聞いてあげたくなる。だから、時々頼まれる面倒くさい仕事も喜んで手伝つし、お茶

の時間に雑談するのを何よりも楽しみにしていた。

そんなマユリに魅力を感じている人間は少なくないと、私はだんだん知ることになる。

2 マユリの本性

マユリが本気で悩んでいるのを知つたのは、数日後のことだ。

「男性が多い職場つて大変だな。居づらい感じ」

給湯室での雑談中、いきなりそんなことを言うから、私はビックリして何があつたのかと聞いた。ちよつと言いよどんでいたマユリだったが、重ねて尋ねると、ようやく口を開く。

「んー……なんか……私の誕生日とつくに過ぎてるんだけど、秋沢さんあきざわからヴィトンのバッグをプレゼントされちゃつて」

「秋沢さん？」

秋沢さんは私のいるグループとは少し違う仕事をしている隣のグループリーダー。樋口さんとは逆のタイプで、誰に対してもフレンドリーでマイルドな男性だ。

仕事は相当できるみたいだけど、とにかく女性に甘い。私も時々「脚が綺麗だね」とかセクハラめいたことを言われるけど、それ以上の接近はないからうまくやり過ごしている。

でも、マユリは歓迎会のときに秋沢さんに送つてもらつたのがきっかけで、相当しつこくプッシ

ユされているみたいだった。

「並んで歩いてたら、いきなり手とかつなげちゃって……正直引いたっていうか……」

「秋沢さん、奥さんも子供もいるよ？」

私はかなり驚いた。

いくら女性に甘い秋沢さんでも、そんな危険な行動をとるなんて。セクハラに厳しい世の中だし、会社に知られたらリーダーのポジションだって危ないくらいなのに。

「だよね……だから私、『こんなことされても嬉しくありません』ってちゃんと断ったんだよ」

「それなのに、しつこくしてくるの？」

「ん……なんか、私の部屋に少し寄せせてとか言われた」

それを聞いて、私は秋沢さんに相当な怒りを覚えた。秋沢さんに、マユリはあなたの誘いを嫌がつてるんだから、潔く身を引いて！　と言ってやりたかった。マユリが可哀想でたまらない。

「まさか部屋に上げたりしなかったでしょ？」

「うん。ハッキリ『嫌です』って断った」

それを聞いて、一応ホツとする。

でも……それで、どうしてバッグをプレゼントされたりするんだろう。ピシャリと拒絶したなら、いくら女性好きな秋沢さんでも強引にブランドのバッグなんてプレゼントするはずがない。

それについて、マユリは何気なく言い訳をした。

「私がヴィトンのお財布を持つてるのを知られて……それで、バッグもヴィトンが欲しいなあっ

て、なんとなく雑談のときに言ったのを覚えてたらしいんだ」

「……」

私は、なんと言っているか一瞬わからなかった。

秋沢さんは女好きだという噂だけど、それでもヴィトンのバッグっていうのは……相当値が張るものだ。

そんな高価なものを受け取ってしまったら、それなりの要求はしてくるかもしれない。

「ねえ、そのバッグ返したほうがいいよ」

私はマユリの身に危険がおよぶ気がして、真剣にそう言った。それはマユリも感じているらしく……「やっぱ、返したほうがいいよね」とつぶやいた。

と、そのとき。涼が不意に給湯室を覗き、私に声をかけた。

「奈々、樋口さんが呼んでたぞ」

ドアの向こうからは私が一人で食器洗いをしているように見えたらしく、涼は私を奈々と名前で呼んだ。

「あ、本当？　わかった……すぐ行く」

そう答えた私の横にマユリがいるのに気づいて、涼の顔が一瞬こわばった。今の会話で、私たちの関係がバレてしまったからだ。

「え、ちょっと……奈々ちゃん。佐々木さんと付き合ってるの？」

マユリとは相当プライベートの話もしてきたけれど、涼とのことはずっと隠していた。だから、思いがけずマユリに知られてしまい、ちよつと恥ずかしくなる。

でも……でも、マユリになら言ってもいいかな、と思ひ、打ち明けた。

「うん、社内恋愛禁止だから……極秘なんだけどね」

「へー……そうなんだ」

いつものマユリの調子を見ると、少しは茶化してくるかなって思ったのに、彼女は逆に、そのままだんまりになつてしまった。私はちよつと意外な気がした。

マユリが苦手だという涼と私が付き合っていることが困惑の原因なのか。それとも、たまたま気分が乗らなかつただけなのか。

マユリが黙り込んだ理由が、私にはよくわからなかつた。

マユリに悩みを打ち明けられた数日後、私はどうしても気になつて、聞いてみた。

「ねえ……例の秋沢さんからもらつたバッグ、返せた？」

給湯室で二人きりのときだつたから、人に聞かれる心配はない。カチャカチャと音をたてて食器を洗いながら、マユリは困つたような照れたような……微妙な顔をした。

「困つた……『返します』って言つたら、『一度プレゼントしたものは返されても受け取れない。』

いらなければゴミに出してくれていいから』って言われちゃつた」

「えー……？」

それは確かに困るよね……と、私は思つた。

値の張る新品のブランドバッグを捨てるというのは、多分相当な罪悪感を伴はずだ。

「それ、結局どうしたの？」

「捨てるのは無理だから、そのまま自分の部屋に置いてある。でも……あれ、彼氏が見たら追及されるかも」

「え、彼氏？」

このとき、私はマユリに彼氏がいることを初めて知つた。

それまでは自分の恋愛について多くを語ろうとしなかつたマユリだけれど、これを境に、付き合つている彼氏のことについても詳しく話してくれるようになった。

マユリの付き合つている相手は、美容師。客として通つているうちに、彼のほうからオフに会えないかと誘つてきて、それ以来付き合うようになったとか……

「彼氏、束縛が激しいから時々窮屈なんだよね」

マユリがそうぼやくのを聞いて、私はちよつと驚いた。こんな魅力的な女の子を独り占めできる男がいるなんて、と。

マユリならまだまだ別の男性を選べる可能性を感じたから。

「でも、話を聞いてると、すごく優しいみたいだね」

「まあ……ね」

マユリの彼氏……「ダイちゃん」は、聞けば聞くほどマユリに入れ込んでいるようだ。男性にそ

これまで尽くされるといふのはどういう気分なのか、私には想像もできなかった。どちらかというといふ私は相手に「何かしてあげたい」と思うタイプ。そして私が付き合っただことのある男性は、たいてい、「何かしてほしい」と思うタイプ。だから余計に、マユリの彼氏が特殊に思えた。

ダイちゃんは毎朝モーニングコールをくれるが、寝起きが悪いマユリは、電話を三回ぐらいもらわないと起きられないらしい。

ダイちゃんって相当マメだな……と驚いたのだけど、それどころかさらに驚く話もあった。

デートの最中、彼女が「アパートにマスカラを忘れた」と騒いだら、彼はマユリをその場に待たせ、ダッシュでアパートまで走ってくれたと言う。

「マユリはマスカラ命だからな」

そう言って彼は、マユリ愛用のウォータープルーフマスカラを手渡してくれたのだそう。

実際、マユリはまだ二十歳という若さなお化粧にかなりこだわりを持っていて、スツピンでは決して外出しないらしい。

「メイクは女の身だしなみだつてママに言われてるの。だから、朝ご飯を食べないことはあつても、メイクなしで出かけたことは一度もないよ」

と「女の極意」を語ったこともある。

ナチュラルに見せつつも、かなり入念にポイントをおさえたメイクは、彼女をこれ以上ないほど輝かせている。

若いのだから、スツピンでも綺麗なはずなのに、彼女は頑なまでにメイクにこだわっていた。

この頃になって、私はマユリ独特の雰囲気によく気付いてきた。それは異性同性に関係なく、「我がままだけど、なぜか許してしまう」と思わせる雰囲気。マユリは、自分が声をかければ大抵の人が「イエス」と頷くことを本能で知っているようだった。

それが……マユリの「恐るべき引力」だった。

樋口さんからの仕事は相変わらず容赦なくて、ここ一か月ぐらいはなかなか涼とデートできなかった。携帯で話すこともあまりないから、最近の涼の様子はマユリのほうが詳しいぐらいだ。

ようやく今度の土日なら会えると涼からメールが届いて、心が躍った。

（久しぶりのデート！ 何を着ていこうかな？ あ、天気がよかつたら外でお弁当を食べてもいいかも）

そう思って、久しぶりに手料理をふるまうことにした。涼は私の作った卵焼きが大好きで、今日も思わず卵六個を使って大量に作ってしまった。

『今日、めちゃくちゃ天気がいいよ。外で会おうか？』

出かける支度しなごをしていると、涼からそんなメールが来た。外の清々すがすがしい空気に触れたい、緑の下でくつろぎたいと、涼も同じ発想を試みたみたいだ。

でもまさか手作りのお弁当が用意されているとは思わなかっただろうけど。

『場所？』

『井の頭公園とか……どう？』

そこは涼と私が初めてデートした思い出の場所。
私は即答でOKした。

休日の井の頭公園は当然といえば当然ながら、かなり混雑していた。都心のオアシスとも呼ばれるこの緑あふれる公園。どれだけ混雑していても、訪れている人々は皆にこやかだ。

あちらこちらで大道芸人の人たちがパフォーマンスをしている。自作のイラストを売る人、小物を並べてバザーを開いている人もいた。それらを楽しく眺めながら、私は露店で可愛いストラップを涼とお揃いで買った。

「やっぱこの公園は人気だよね」

「うん。けどお弁当食べられる場所……ないなあ」

並んで歩きながら、なんとか座れる場所を探す。

結局、ベンチと言えなくもない木の根の盛り上がりつつあるところに腰かけて、やや苦しい体勢でお弁当を食べることになった。それでも私たちは一緒にいられるのが嬉しくて笑いが絶えない。

「美味しい！ 奈々って本当に料理うまいよなあ」

「そうかな」

真顔で褒められてしまい、私は照れる。涼はストレートな男性だから、褒め言葉にも嘘がない。おにぎりを食べながら、改めて涼の横顔を見つめる。

未来も言っていたけれど、やっぱり涼は「カッコイイ男」の部類に入るんだろう。スツと通った

鼻筋に優しそうな奥二重の目。嫌味のない口元も好印象だ。何より、性格が温厚で一緒にいると癒される感じがする。

職場では仕事に没頭しているから、無口な怖い人に見られることもあるようだ。少し親しくなれば涼が温和人間だとわかるのに、もったいないなあと思う。

「あ、奈々。約束してたあれ……できてたよ」

涼は思い出したようにそう言って、ポケットから小さな箱を取り出した。ちゃんと包装されていて、可愛らしくリボンまでついている。

「なに、なに？」

私は箱の中身がわかっていながら、涼の口から言わせようとせつついた。

「サイズ調整待ちしてた指輪だよ」

涼は素直にそう答え、私の手にボンと箱をのせてくれた。

「ありがとう！ すごく嬉しい」

「奈々が喜んでくれたら、俺も嬉しいよ」

「うん！」

幸せな気分を箱を開けてみると、キラリと光るシルバリングが顔を出した。あの日見たアクアマリンが、私に「こんにちは」と話しかけているように見える。

デザインがシンプルで毎日つけていても飽きがこないだろう、そう思ったから、これを選んだ。

改めて指にはめてみると、思った以上に素敵だ。

「わあ、素敵！」

「なんだか、愛の証」をもらった気がして、舞い上がってしまう。

「シンプルなのに近くで見るとけっこう存在感があつて、いい感じだよな」

私の喜ぶ姿を見て、涼も笑顔になる。

「うんうん。ありがとう。涼の誕生日には何をお返ししようかなあ」

「ぷっ！ プレゼントをもらったとたんにお返しのことを考えるなんて、奈々らしいよな」

「そう？」

「うん。そういうところが好きなんだけどね」

涼がストレートに「好き」って言うてくれるのはめずらしいから、私はちよつと恥ずかしくなつて話を逸らした。

「そういえば……マユちゃんとの仕事はどう？ 終わりそうなの？」

普段はデートのときに仕事の話なんかしないようにしているのだけど、マユリが涼との仕事をなんとなく苦痛そうにしているのが気になっていた。

「マユちゃんって、江藤さんのこと？」

「そう」

マユリと私が仲良しなのは涼も知っているので、マユリのこと話題に上つても特に不自然な空気にはならない。

「まあ順調だよ。あの子、雑談しながらも仕事はちゃんとやるから……問題ないよ」

涼の答えを聞いて、あれ？ と思う。つい昨日もマユリは「佐々木さんとうまくいかない」とつぶやいていたのに。

「雑談って何話すの？」

もしかして話題がマユリにとって苦痛だったんだらうか？ けれど、涼にとっては特に気にかけるほどのことでもなかったのか、会話の内容は覚えてないと言われた。

私の心の中に黒いものがポツリと落ちた。

マユリのことは好きだ。

可愛いし、私を頼ってくれている。自分の彼氏についても隠さず話してくれるし、会社での悩みも相談してくれる。

でも、涼と雑談をしているなんて、一度も話してなかった。

質問すらしづらいという感じで、とにかく苦手なのだと言わされている。だから、私は涼とマユリは相性が悪いのだろうと思っていた。でも涼の話を見ると、特別関係は悪くなさそう……というより、どちらかというと上手くいっているみたいだ。

マユリを悪く思いたくはない。多分、たまたま涼の話をマユリがしなかっただけのこと。そう、ただそれだけのことだと思いたい。

でも……この心についた黒いシミの消し方を、私はまだ知らなかった。

少しモヤモヤした気分のまま月曜日を迎えた。

自分の中に納得のいかない何かがあることを、結局、涼には言えなかった。マユリの悪口みたいになってしまいそうだし、空気が悪くなってしまうのも嫌だったから。

ただ、マユリと会話した内容をちゃんと覚えていてほしい……というようなことは少し話した。『奈々ちゃん……ちよつといい？』

データ打ち込みの作業中、マユリから社内メールが入った。

『どうしたの？』

『相談したいことがあるの。休憩室、誰もいないから……そこで少しいいかな』

なんだか、かなり深刻らしい。昼休みに話そう、とも言えず、了承の返事をした。

休憩室でお茶を買って向かい合う私たち。

マユリの顔は曇りぎみで、いつもの元気な笑顔がない。

「何……どうしたの？」

多分男性絡みだろうな……と私は直感していた。マユリの相談事は、八割が異性問題だ。

今度は誰だろう、なんて思ってしまう。

「広報の梶山さんって知ってる？ 背の高いちよつとカッコイイ人」

やはり男性のことらしい。

「梶山さん？ 知らないなあ……」

私は本当に社内の人間に無関心で、情報のほとんどを未来から得ている。広報には時々荷物を受け取りに顔を出すけど、人の名前は全然覚えていない。

「髪がちよつと茶色で、独特の声でしゃべる人なんだけど……わからないかな？」

「……ああ、あの愛想のいい人？」

言われてみると、その人物には心当たりがあった。

いつもテンションが高めで、秋沢さんほどではないにしても、好きっぽい感じの男性だ。

私が梶山さんを思い出したので、マユリは嬉しそうな笑顔になる。

「そう、その人。で……なんかね、広報の飲み会に無理やり出席させられて、彼にメアド教えちゃったんだよ」

「またか！」と思っただけれど、私は辛抱強くマユリの話を聞いた。

「超強引でさー、しょうがないから教えただけど。でも、それから毎日みたいにメールがきて、めんどくさいんだ」

「あ、そうなんだ」

あまりにも「いつものパターン」だったから、私はそれ以上何も言えなくなる。マユリの話がこれだけなら良かったのだけど、最近一緒に飲まないかという誘いが入って、困っていると聞いて私も少し考えてしまった。

「もちろん断り続けたほうがいいと思うよ……だって、ダイちゃんに悪いでしょ？」

ダイちゃんという彼氏がいるのに、どうしてこんなに男性に対してガードが甘い……と説教したくなるのをグツとこらえる。

「だよー。でも、ちよつとカッコイイから一回飲むくらいならいいかなあって思う部分もあるん

だよね」

「ええ!？」

マユリの悩みは、私の予想とズレていた。

言い寄られて困っているのは事実だけれど、それほど嫌な気分でもない……というのが本音みただ。

「奥さんどううまくいってなくて、苦しいとか聞くと……なんか話聞いてあげたくなるし」

そう言うマユリに私は、「絶対一人きりで会っては駄目!」と釘を刺した。

梶山さんが結婚しているというのは初めて聞く話だけれど、「妻どううまくいっていない」と口にするのは、浮気男のお約束みたいなものなのだ。

間違ひなくマユリは浮気の標的にされている。それがわかったからこそ会うのを強く反対したのだけれど、マユリは微妙な顔をして、「だね!……なんとかうまく断ってみる」と、どこかそっけない言葉を残して休憩室を出ていった。

彼女は私に別の反応を期待していたようだ。

「モテるね」とか「マユちゃん、人気あるもんね」なんて言ってほしかったんだろうか。どうでもいい人間が相手だったら、そんなふうに気軽に茶化したかもしれない。でも私は本気でマユリを心配したからこそ梶山さんとの付き合いを止めた。

私は何故マユリのこととなると、こうムキになってしまうのか。どうして彼女の悩みに対してイライラしてしまうのか。

マユリが笑顔でいてくれないと不安になるというのは、ちよつと普通じゃない気がする。「おはよ、奈々ちゃん」と、内股で立つ人形のようなマユリを見るとホツとするのだ。悩み事なんかじゃなく、ダイちゃんとのノロケ話を聞かされるときが一番落ち着くのだ。

マユリの全てを知っているのは彼氏のダイちゃんなのだろうけれど、会社では一番自分が頼られていると思うと……不必要なほどのおせっかい魂が騒ぐ。

誰だつて好きな人の役に立てれば嬉しいだろう。でも私は純粋にマユリのためになることを喜んでいたわけじゃない。よくよく心の中を覗いてみると、マユリに優しくしている自分に満足している偽善的な私がいるのだ。今まで気付かなかつた自分の嫌な部分を見つけた気がして、軽く落ち込む。他人との距離をうまくはかれないタイプなのは、自分でもよく承知している。仲良くなると、男女問わず相手と深く関わろうとする。そして、相手にとって無二の存在になろうとしてしまう。

こんなおせっかいな性格を決して長所だとは思っていない。だからこそ今まで会社の人間と極力関わらないようにしてきたのだ。心を許しているのは、未来だけだ。

でも……マユリは私の相当深い部分にまで入り込んでしまっていた。

マユリのことを好きだと思ってる。でも……時々その気持ちだが、たとえようのない虚しさに変化する。

「相澤さん、今日残業できるか？」

パソコンで入力作業をしていると、樋口さんが声をかけてきた。

これは面倒なことを頼まれるぞ……と直感が働き、思わず身構える。

「まあ……少しでしたら」

「そう遠慮するな。すぐく面倒だけど、どうしてもやってもらわないといけない仕事があつて……それを手伝ってほしいんだよ」

せっかく山積みだった仕事が付いてきたというのに、またもや面倒な仕事舞い込むらしい。

げんなりしながら、新たな仕事の内容を聞いた。

場所を移して説明するという樋口さんに連れられて、古倉庫に行った。

そこにある資料全部をリストにして、データ登録するという仕事だった。ざっと見積もっても何千冊という膨大な資料……考えるだけで眩暈がしそうだ。

「これを全部、やらないといけないんですか」

「そうだ、やらないといけない。俺も暇を見つけて手伝うし、とりあえず今日は仕事のやり方を覚えてもらいたいから……少し残ってくれないか」

こう言われたら逃げ道はない。

「わかりました」

そう言つて樋口さんの作業を見て手順を覚えようとしていた私に、声かけられた。

「とりあえず資料が番号順になつてるか確認してくれるか？」

「わかりました」

確かめると、資料はちゃんと順番どおり綺麗に並んでいる。

管理が良かったようで、欠番もなく全部きちんと揃っていた。ただ、背表紙が英語だから、これを書き留めるのが大変そうだ。

そんなことを思つた瞬間、体がブルブルと震えた。倉庫には暖房なんかないから、当然寒い。

カーディガンでも着てくればよかったかな、と思つていたら。

「寒いか？」

カタカタ震えている私を見て、樋口さんがそう言った。

「ええ。日も暮れたし……もともとここってひと気がないせいかな、相当寒いですね」

やせ我慢もできないほど寒かったので正直に答える。そんな私を見て、めずらしく樋口さんが優しく笑った。この人が笑うところなんて、飲み会の席ですら見た記憶がない。

いつも自分の世界に入り込んで感じる感じで、人に声をかけられてもなかなか反応を示さない。

どこか……“影”をひきずっているような男性。

私にとって、樋口さんは大人すぎるのかもしれない。親しみを込めてつきあおうという気持ちに

はなれなかった。

「俺の仕事手伝ってるの、相澤さんだけだから……風邪で休まれると困るな」

そう言っ、樋口さんは自分の着ていたジャケットを私にフワリとかけてくれた。

こんな紳士的な態度をとる彼を初めて見たから、ちょっと戸惑う。でも正直なところ、ジャケットは相当暖かくて……樋口さんの温もりにホッとした。

「私は暖かいですけど、樋口さんが風邪ひきますよ」

隣にいる彼を見上げる。

でも、シャツとネクタイだけの姿になった彼は、特に寒そうな様子も見せずに、埃をかぶった古い資料を数冊抜き取っていた。

「俺は丈夫だから、心配するな。それより……これ、早くデータにしないと。焼却処分されてしまうと、資料があつた痕跡すらなくなるからなあ」

「なんでそういう大事なことを今まで後回しにしてたんですか？」

私はジャケットをがっちり握って、樋口さんが持つ資料を覗き込んだ。腕と腕が触れ合うほど近くに寄ってしまい、思わずドキッとする。

「面倒だし、誰もやりたくないって言うから……のびのびになつてた」

ということは、その面倒な仕事を私ならやると思つたつてことだろうか。いつもハイハイといい顔をして仕事を引き受けてきたけれど、便利扱いされるのは困るなあ。

軽く落ち込んでいると、樋口さんは不思議そうに私を見下ろした。

普通に並んでいるのだけど、樋口さんは背が高すぎるから、私を見るときはどうしても「見下ろす」かたちになる。

「君が嫌だつて言うなら無理強いはしないが……」

いつもなら「文句言わずにやれよ」と来るはずなのに、今日はなんだか対応がマイルドだ。もしかしたら私がちょっと元気がないのに気付いているのかな。そのポーカーフォイスからは真意を測れなかつたけれど。

「いえ、頑張ります。ちょうど仕事が落ち着いてきたところなので」

「そうか。ならお願いするよ」

その後、私はデータの入力方法を教わって、この日の残業を終えた。

樋口さんとあんなに近くで話したのは初めてだったけれど、案外優しい部分もある人なんだな……なんて思ったりした。

日が経つにつれ、マユリは、私に悩み相談があると言つては男性絡みの自慢話をするようになっていった。

聞いているうちに、私はマユリに対して嫌悪に近い感情を抱くようになり……自分の心が黒くなつていくのがどうにも悲しかった。

マユリは皆に評判がいいから、うっかり愚痴もこぼせない。マユリのことを相談できるのは未来だけだった。未来とは部署こそ違ふけれど、昼休みは必ず一緒なので、マユリに関する悩みをポツ

リポツリと打ち明けていた。

「元氣ないじゃん。今日も何かあった？」

例の資料をリスト化する作業と他の仕事を抱えて余裕がなくなっていたし、あの倉庫に入ってきたりも体調が思わしくなかった。そのうえマユリのことでもイライラしていた私は、思わず大きな溜め息をついてしまう。

「ううん。なんか……仕事を抱えすぎちゃって……でも新しい仕事を頼まれても嫌って言えないんだよね」

と自己嫌悪に陥る私に、未来はフォローを入れてくれる。

「それが奈々らしさなんじゃない。人がいい証拠。でもさ、大変なら誰かに助けを求めればいいんだよ。そういう部分では江藤さんを見習ってもいいかもよ」

未来はそう冗談めかして言う。

「……ま、そうだよ。ダメだなー……年上なのに、私ってば彼女に負けてるよね」

「まあまあ。とにかく江藤さんとは距離を保ったほうがいいと思うけど」

未来は私に比べたらずっと「世間」を知っている。私なんかは表面的なものを見て、すぐに信じちゃうけど、未来は、人間はそう簡単に信じてはいけない複雑な生き物であるということをよく知っていた。だから、最初からマユリに深く関わろうとせず、たまに会話をするとともに絶妙な距離を置いている。

でも私は、明らかに距離の取り方を間違ってしまった。

友達として好意をもたれているわけでもないのに、友達気取りでおせっかきを焼き、その上、マユリから“なめられている”。

機嫌のいい日にはマユリは相変わらず可愛らしく私に話しかけてくるけど、自分の気分が乗らないときや、私がマユリの意に沿わない返事をすると、すぐに不機嫌になる。だからって無視するのも大人げないな……と思ひ、私はつとめていつもどおりの応対をしていた。

しかし心の底に芽生えた黒い感情が、マユリと話をするたびに大きく育っていくような気がした。この嫌な感情を早く払拭してしまいたくて、私は涼が忙しくしているとわかっていながら、今週中に会えないかとメールをした。

午後、資料を持って廊下を歩いていたら、未来が会議室に入っていくのが見えた。相変わらず美人で憧れてしまう。

未来の父親は画家で、娘に“大和なでしこ”になることを求めているという。だから未来はいつも身なりがきちんとしていて、姿勢もいい。そして彼女にぴったりのフローラル系の香水が傍に寄ってきた男性を瞬時に脳殺する。

なのに本人は、「あー、男ってしつこいから、嫌いー」なんて言っているのだから面白い。

そんな未来にも好きな男性のタイプみたいな俗っぽい好みがあるのか興味が湧いて、聞いたことがある。そうしたら、「奈々のとこの樋口さん？ あの人超タイプ」なんて言ったから、椅子から転がり落ちそうになった。

「あの人全然優しくないよ!？」

樋口さんと仕事で直接関わっている私にとっては、「たまには休んでくれないかな」と思っ
まうぐらい煙たい存在。

でも未来に言わせると、彼は理想の男性だという。

「あのさー、奈々。人間の優しさって、目に見えないものだと思うけど……」

「目に見えない優しさ？ あの樋口さんにそういうのがある？」

私が目を丸くしていると、逆に未来に驚かれた。

「あんないい男に気付かないんだ！ 私に誘いをかけてこない男っていつたら、彼ぐらだよ？
それが魅力だっていうんじゃないけど、なんていうか……男らしいプライド持ってるよ、あの人」

未来の言葉には笑い飛ばせない雰囲気があつて、私は息をのんで聞いていた。

「樋口さん……夜中まで頑張つて、自分の仕事じゃないものまでこなしてるの知ってる？」

「知らない。ていうか、なんで未来がそんなこと知ってるの？」

部署が違うのに仕事の内容を多少なりとも知っているのは、それだけ強い関心を持っているとい
うことだろう。未来は本気で樋口さんを入っているのかな……と思った。

「うちの上司が全然仕事をこなせなくて、樋口さんに協力してほしいとか頼んでるのを聞いちゃっ
たんだよ。樋口さん、その仕事引き受けてるんだよ。当然分野が違うから相当苦労してるはずな
んだけど……」

初めて聞く話だった。

樋口さんが別の部署の仕事を引き受けてるなんて、うちのグループの人は、誰も知らないはずだ。

(……あの樋口さんがねえ)

未来との会話を思い出して、樋口さんの意外性について考えていると、涼から返信メールが届いた。

『金曜日の夜。仕事が終わったら奈々のアパートに行くよ』

断られるかとも思ったけど、案外スムーズにOKの返事をもらい、ホッとした。涼に癒^いしてもら
つて、心の中の黒い感情を、消してしまいたい。

そうすれば、また優しい気持ちでマユリに接することができるはず。

だけど、ちょっと不安なのは、涼がマユリと親しくしていること。

でもそれは仕事なんだからって自分に言い聞かせる。

そう。

涼は浮気とかできるタイプじゃない。外見も素敵で、性格もいい。嘘もつかないし、誠実。

あと一年ぐらい付き合えば、結婚の話をしたっておかしくないだろう。二人で一緒に暮らす日を
空想しながらニヤニヤしてしまうこともしょっちゅうだ。

涼と会う約束をとりつけたあと、私は気の緩みが出たのか……資料室で作業をしているうちに、
頭が痛くなってきた。まずいかな、と思つて薬を飲んだけど、どんどんひどくなつていく。
そうしているうちに、とうとう私は資料室の床に座り込んでしまった。

どうやら風邪をひいてしまったようだ。お昼に食べたものもちゃんと消化できていない感じで気
持ち悪い。

「どうした？」

手伝いに来てくれたのだろう、樋口さんが私を見つけ、駆け寄ってくる。

「頭が……頭が痛くて。それに、お腹も気持ち悪くて」

相手が樋口さんだということも忘れ、私はそのままぐったりと壁によりかかった。

「風邪か？ 寒い資料室で仕事させたのは俺だから……」

そう言うと樋口さんは私の額に手を当て、熱の具合を見た。その直後、私は彼に抱き上げられた。「え？」

さすがに驚いて、ボンヤリしていた頭が一瞬クリアになった。

だって、社内で上司にお姫様抱っこされるなんて、あり得ない！

「駄目ですよ！ 降ろしてください。こんなの誰かに見られたら……！」

じたばたする私にかまわず、彼はスタスタと資料室を出る。

「大丈夫だ。医務室まで裏道がある。そこを通れば誰にも見られずに済むだろう」

「……」

ちやんと考えたうえでの行動なのだわかって、私はホッと……一瞬忘れていた具合の悪さが戻ってきて、再びぐったりしてしまう。

力の抜けた体がずり落ちないようにしっかりと支えてくれる樋口さん。

胸板の厚さがスーツ越しにもわかる。たくましい男性の体。

(樋口さんに抱き上げられるなんて……嘘みたい)

「相澤さん」

「はい」

「今日の帰りは送るから。医務室で定時まで休んでろ」

(え？ 樋口さんが私を送ってくれる？)

びっくりして口をきけずにいる私にかまわず、彼は医務室のドアを開け、私を空いているベッドに寝かせてくれた。

「風邪薬程度で治る熱じゃない気がする。保険証があるなら病院に寄ったほうがいいだろう」

「保険証……持ってないです」

ベッドに寝ているも体が痛い。ゾクゾクして寒気がとれない。もしかしたらインフルエンザかもしれない……

樋口さんも私の様子を見て同じように思ったようで、保険証はあとでいいからとにかく病院へ寄ろうと言いつ残し……医務室の温度調整をして、出ていってしまった。

シンとした医務室に一人残され、急に心細くなる。樋口さんがずっと一緒にいてくれたらよかったのと思ったくらいだ。

(涼……具合悪いなんてメールしたら心配するよね)

一度携帯を開いたけれど、涼に余計な負担をかけたくなって、そのまま何もせずに閉じた。その後、樋口さんは本当に定時ちょっと過ぎに私を迎えに来てくれた。

「歩くのもしんどいだろう？ 社用車を借りた。後部座席に乗るといい」

スポーツ飲料を手渡し、彼は私を支えるようにして社用車まで連れていってくれた。

「君のカバンはこれか？」

キナリのバッグ。間違いない私のだったから、コクリと頷いた。

「制服は着替えていられないだろうから、今日はそのまま帰るんだな」

「……はい」

もう樋口さんの言いなりだ。

涼はこんなふうには状況判断が早くないし、私の世話を焼くというのもあまりない。だからか、樋口さんから受ける親切がなんだかとても新鮮だった。

言葉は荒くぶつきらぼうだけれど、一分の時間も無駄にできないほど忙しい彼が私のために時間を割いてくれている。未来が言っていた、樋口さんの中に潜む優しさが少しわかったような気がした。

案の定、病院でインフルエンザという診断を受けた。薬をもらってのむ。再び社用車に乗ると、私は後部座席に寝かされた。

「やっぱりインフルエンザだったな。しかし君も無茶をする……具合が悪いなら、そう言ってくれないとこっちはわからないからな」

樋口さんは自分のジャケットをフワリと私の体にかけてくれた。あの日……資料室でしてくれたのと同じように。

「すみません。ご迷惑おかけして」

「いや」

謝る私を制して、樋口さんは私の顔をじっと見た。

「謝るのは俺のほうだ。無理をさせすぎたな……悪かった」

「……」

樋口さんが私に「悪かった」なんて言う場面、想像したこともなかった。そのせいか、彼の低い落ち着いた声が、妙に私の心をざわつかせる。

(病気で心が弱くなっちゃってるのかな。なんだか樋口さんが頼もしく見えてしまう)

ボンヤリした頭でそんなことを考えつつ、私は自分のアパートまで彼に送ってもらったのだった。

4 不穏な空気

「ねえ……奈々、気を付けたほうがいいよ」

三日後、熱も下がり、お医者さんに出社許可をもらってようやく出勤した朝。未来が、私にこそっと耳打ちした。

「え、何を？」

「事情はわからないけど、この前、江藤さんが佐々木くんと一緒に歩いているの見たんだよ」

それを聞いて、私はかなり驚いた。

あのあと、私は涼にインフルエンザで会社を休むことをメールしたけど、涼は忙しいと言って、見舞いにも来てくれなかった。

忙しいのだからしょうがないと思っていたし、会う約束をしているのは明日の夜だったから……それまで我慢しようと思っていた。

なのに……マユリと二人で会っていたなんて、かなり衝撃的な話だ。

「単に偶然一緒になったんじゃないの？」

「だといんだけど、江藤さんが妙に楽しそうに彼に寄り添ってるように見えたからさ……他人事ながら嫌な気分になった。でも私の気のまわしすぎかも。変なこと言ってごめんね」

それだけ言って、未来は去った。

「……」

しばし仕事の手を止めて、真面目にパソコンに向かっている涼の顔を見る。

いつもどおり真剣に仕事に取り組んでいて、時々隣にいるマユリに質問をされている。何が楽しいのかはわからないけど、一緒に書類を覗き込んで、二人で同時に笑顔になるのが見えた。

その瞬間だ。

私の中で、何か猛烈な負のエネルギーが湧き出した。

止めようとしても止まらない……たまらなく嫌な感情の噴出だった。

「相澤さん、おい……相澤さん！」

涼とマユリの様子に気をとられていて、気付かなかったのだろう。いつの間にか樋口さんが何度

も私のことを呼んでいた。

「あ、はい。すみません」

「体調まだ悪いのか？ 顔色悪いぞ」

「いえ。大丈夫です……すみません」

樋口さんは私の様子を気にかけてくれて、本調子になるまでは、と仕事の量も減らしてくれた。

顔色が悪いのは樋口さんのせいじゃない。でも、その理由をここで言うわけにもいかない……

「無理があったら言えよ？」

「はい。ありがとうございます」

本当は樋口さんに改めてあの日のお礼を言いたかった。上司としての責任なんだろうけれど、私に優しく接してくれて、おかげで早い段階でインフルエンザを治すことができた。

でも、今の私は心に余裕がなくて……

さつき噴出した黒い感情に、まだ支配されている。そのイライラが外に向かって出てしまいそうだった。

「……疲れてるみたいだから、今度食事でもご馳走してやるよ」

「え？」

樋口さんが冗談でもこんな誘いをかけるなんてあり得ない。

表情を見てみると、やっぱりいつもの真面目くさった仕事人間の顔だ。

「冗談……ですよ？」

「なんだよ、俺と一緒にだと食事がまずくなるとも言うのか？」

明らかにご機嫌を損ねた様子。私は慌てて訂正した。

「違います、ええと……樋口さんがそういうことをおっしゃるとは思わなかったのよ」

「俺だって鬼じゃないんだよ、たまには部下をねぎらおうって気持ちを持つてるつもりだ」
憤慨しつつも、私を食事に誘ったのは彼の本心らしい。

「樋口さんって絶対ケチだと思う！一度もご飯とかご馳走になったことがないもの」と常々ぼやいていた自分を思い出し、恥ずかしくなった。

「ありがとうございます」

まだきちんと約束をしたわけでもないのに、ペコリと頭を下げてお礼を言った。

「フン。じゃあ……月末にでも」

無愛想なまま樋口さんはそう言うと、私に書類を渡して席に戻った。

格別優しい言葉には聞こえなかったけれど、彼なりに気を遣ってくれたのかもしれない。

約束どおり……涼は金曜日の夜七時に、私のアパートを訪れた。

「おかえり！お仕事おつかれさま」

笑顔で涼を迎え、いつもどおり優しく私を抱きしめてくれるのを待った。

でも、この日は優しい抱擁もキスもなかった。それどころか、涼は部屋に入るなり、マユリのことを話し始める。

「江藤さんってさ、優しすぎるのかな」

「何の話？」

突然だったから、私は驚いて涼を見上げた。

「なんか……いろいろな男に言い寄られて大変みたいだから。守ってあげられないかな？」

何の悪気もなく、涼はあっけらかんと、そんな話をする。

「彼女可愛いから人気あるじゃん。俺なんか、彼女と一緒に仕事をしてるってだけで嫉妬されるんだよ」

笑う涼と、笑みを作れない私。

自分の彼女の前で別の女性を「可愛い」と評価する神経にイライラしてしまう。

「そうなんだ……」

そんな私の様子にちっとも気付かず、今度は嬉しそうにマユリが言っていたという話を口にし始める。

(聞きたくない。マユちゃんとの会話なんか、知りたくない)

私の心がどんどん暗闇に沈んでゆく。

「マユちゃんのこと……気に入ってるの？」

「な、何言ってるんだよ？」

うるたえた態度から、涼が私に対して後ろめたさを抱いているのがわかってしまった。

「ううん、なんでもない」

こんなことを言う自分は嫌いだ。

涼のことは心から信頼してる……疑うなんて、意味のないことだ。そう自分に言い聞かせて、笑顔を作る。涼の前で暗い顔をする事だけは、どうにか回避した。

私は、こんな人間じゃなかった。

少なくとも涼の前では、自分の本当の感情を偽ったり演じたりしたことはなかった。

ありのままの心で、人を素直に信じられることが自分の長所だと思っていた。

人間関係は難しいから、うかつに深入りするのはトラブルの元だつてことは、未来に言われて心得ていたつもりだ。

でも、マユリに対しては妹ができたみたいで嬉しくて……心を開いた。

可愛い後輩の笑顔が見たくて、自分なりに努力した。見返りなんか求めていなかった。

それがまさか、涼を奪われるかもしれない危機に陥るなんて……予測不可能だった。

私はただ楽しく笑っていたかった。

マユリと一緒に時々互いの彼氏の自慢話をして盛り上がっていたかった。

ただそれだけだったのに――

この日以来、私は、涼とマユリの仕事風景をなるべく見ないようにした。

時々お茶を淹れにマユリが通りかかる。機嫌がいい日は「お疲れさま！ 忙しい？」なんて言つて立ち止まるのだけど、機嫌が悪かったり何か不満があったりする日は目も合わせずにスルーして

いく。当然私もいい気分にはなれない。
そんなある日。その日は、いつまで経ってもマユリの機嫌が直らなかつた。それがずっと気になりつつも、聞くこともできず、私は、仕事を終えると更衣室へ向かう。
先に着替えを済ませていたマユリが私を見て表情を硬くした。
「お疲れさま」
私はいつもの調子で明るく挨拶する。それに対して、マユリは、ふてくされたような声で返してきた。

「……お疲れさま」
「どうしたの？ 何かあった？」
マユリの異変を無視しきれず、そう尋ねると、彼女は私から目をそらした。
「ううん。別に」
そう言い残し、少し怒った表情のままマユリは更衣室を出ていった。
「……」
（あゝ……いったい何があったっていうの？）

マユリの気分に振り回される日々、いい加減うんざりしてきた……というのが本音だった。相手の心を無視して自由奔放に振る舞うマユリ。
どんなに私が気を遣っても、それが裏目に出て、「うつつとうしい」という顔をされることもある。それに、涼と話しているときは、明らかにテンションが上がっているのもやっぱり気になる。

多少の我がままは彼女の可愛らしさだし、男性から見れば「何でもやってあげる」という気持ちにさせられるのかもしれない。

女の私ですら、マリヲを独占したいと思うほど、愛着を感じたのは確かだ。

今だって、できるなら涼の問題を解決して、マリヲとの関係を平穏なものにしておきたい。

でも……世の中っていうのは、「決して起こってほしくないこと」が、見事に起きてしまったりする。

その日はめずらしく涼のほうから『会いたい』とメールをしてきた。何か嫌な予感がしたけれど、私はいつもとどおり『いいよ』と返答するしかなかった。

涼は相変わらず時間遵守で、気を利かせてケーキのお土産まで買ってきてくれた。

「ありがとう。ちょうど甘いもの食べたかったんだ。ねえ、夜ご飯は焼魚でいいかな？」

涼の顔を見たとき、なんだか甘えたい気分になって……私は彼に寄り添おうとした。

でも……涼は私と目を合わせてくれない。

「ここしばらく外食してたから、普通の白いご飯があればそれでいいよ」

そんなことを言っただけで部屋に入ってくる。身長が高いから、どことなく体を前かがみにして歩く涼の姿。

いつもはここで「ただいま」って言ってギュッと抱きしめてくれるのに、彼はなんの迷いもなく私の前を素通りした。

とたん、心に鉛玉でも撃ち込まれたような気持ちになる。

(私がインフルエンザにかかっているにも心配すらない涼。いったいあなたは私の何?)

「ねえ……何かあった？」

たまらず、強い口調でそう言ってしまった。

「え、なんで？」

驚いたような顔で涼が振り返る。表情ににじむ罪悪感。隠し事のできない性格が、モロに出る。

これが涼のいい部分でもあり、揉め事を最小限にとどめたい場合にはやつぱいになる部分でもある。

「一人で外食するの、あまり好きじゃなかったでしょ？ どうしたの？」

なるべく平静を装ってご飯の支度をやる。ケーキの箱は冷蔵庫にしまっておいた。

「あ、うん。ちょっと相談受けて……外で話すことが多かったんだよ」

やや気まずそうにそう言って、涼は食卓に並んだおかずを眺める。

美味しく食べてもらうには、今は話を進めないほうがいいだろうと思って……とりあえず「そんなんだ」とだけ答えた。

(今クドクド言っても、心証を悪くするだけ)

そう思って私は炊き立てのご飯を涼専用のお茶碗によそう。

時間があるときは二人でお味噌汁を作ったりもしていた。涼はあまり器用じゃないから、手伝わせると野菜の形が不揃いになる。それでも二人でキッチンに立って料理するのは楽しいし、嫌じゃない。

「また今度簡単なメニューを考えるから、一緒に料理しようよ」
明るくそんな話題をふってみる。

それに対して涼は「うん、そうだね」とだけ答えて、ご飯をもくもくと口に運んだ。
(変だ。やっぱり、おかしい)

以前の涼は、食事中でも私の話にはいつも乗ってくれた。

今の質問を言えば……「簡単なメニューって例えばどんなの？」とか聞いてくるはず。なのに、私の言葉などほとんど頭に入らないように流された。

なんだか言いようもなく苦しくなって、私はご飯を残してしまった。でもせっかくケーキを買ってきてくれたんだからと、コーヒーを淹れる準備をする。

ちよつと面倒だけど、やっぱり挽きたてのコーヒーのほうが美味しいから、ミルで豆を挽くことにした。

豆が細かく砕ける音が部屋に響く。そのことで、二人の間に全く会話がなことを思い知らされた。「あのさ、さっき言ってた相談を受けてるっていう相手……誰なの？」

涼がご飯を食べ終えるのを見計らって、私はたまらず口を開いた。

すると、涼は茶碗を流しに置きながら、少しだけ沈黙した。

「言いたくない？」

責めるつもりじゃないのに、言葉が鋭くなってしまふ。

そんな私を見て、涼は困ったような顔を見せた。

「いや、そうじゃなくて。言ったら、奈々が誤解するような気がして」
「誤解？ 何を誤解するっていうの？」

答えがわかっているテストを受けているような感覚で、私はそう質問する。

「前も少し言っただろ？ 江藤さん……あの子に会社でのセクハラの相談を受けてるんだよ。本当にそれだけなんだけどさ、奈々もあんまりいい気はしなかなと思っただけ。彼女にも口止めされてたし……言い出せなかった」

言いたくなかった……という雰囲気、涼は声を小さくした。

涼の言葉に、私はしばらく沈黙した。

美味しそうなケーキと湯気の立つコーヒー。普段の私なら、涼のケーキにのった苺も、ちようだい！”なんて言って、甘えるのだけど……この日はとてもそんな気分になれなかった。

せっかく涼が買ってきてくれたケーキが乾燥してゆく。そのとき涼が微かに溜め息を漏らした。私が不愉快になるかもしれないと思っただけのこと、涼の中に何か後ろめたいことがあるのかもしれない。

「マユリが涼にセクハラの相談をしている。私にも同じ相談をしているというのに、何故涼にまでそんな相談をしているのか……。理由は明白だけれど、認めたくなかった。」

「ねえ、誰のセクハラについて言ってた？ 私も聞いているからさ……そんなに深刻なのかな？」

よどんだ空気を散らそうと、私はわざと明るめの声で聞いた。

涼はケーキには全く手をつけず、コーヒーだけをすすする。

「深刻だから俺なんかにも相談してるんだと思うけど。秋沢さんと梶山さん？　なんか、断れない誘い方をされてるみたいで……奈々もそういうの聞いているの？」

私の印象では、断れないというほど困ってるようには見えなかった。ただ誘われていることを微かに自慢したいのかな……という感じだった気がする。

こういう見方は意地悪だろうか……女特有の意地の悪さが私にも芽生えてるんだろうか。そう考えると、とてもみじめな気持ちになる。

「江藤さん若いし、ノリがいいし……だから、男性社員もちよつと浮かれてるところがあるのかなと思って。江藤さんには、不用意に心の中を他人に話さないほうがいいよってアドバイスしてる」「そうなんだ」

口下手な涼が、マユリにそこまで丁寧な対応をしているっていうのが、かなり意外だった。

女性と話すのは気を遣うから面倒だというスタンスの涼だ。私と話すことができれば、他の女性とおしゃべりしようって気にはならないと言っていた。

なのに……マユリにはかなり心を砕いている様子だ。

マユリが男性関係に悩むのは、自業自得な部分もあると私は思っている。でもそれを言ったらキツイ言葉になるから、あえて口にはしないけれど……マユリは自分の態度がセクハラを招いているという自覚はないのだろうか？

「それで、マユちゃんは何て答えるの？」

「これからは心の中身は……俺にだけ言う……って言ってた」

涼は言葉尻を濁した。私が機嫌を悪くするとわかっているようだ。

「そういう相談を受けたら、個人的にどんどん親しくなるよね」

嫌な女になりたくない。もつと涼を信じて大きく構えていたい。

なのに……私は、マユリと涼への猜疑心でいっぱいになっている。

「なんだよ。まるで俺が浮気してるみたいな言い方するなよ」

めずらしく涼が怒りを表に出した。めつたにこういう姿は見せないから、少しひるむ。

「そんなこと言ってるやない。ただ、マユちゃんとは仕事上で繋がってるだけでいいんじゃないかって思ってる。あの子の悩みは私が全部聞いてるから……涼はあまり深入りしないほうがいいと思う」

私らしくない態度。

いつもおおらかで……穏やかな雰囲気がいいと未来が言ってくれたように、涼の前ではいつもそんな私だった。

でも、今、私はこれまで彼に見せたことのない「嫉妬」をあからさまに出してしまっている。

「奈々がそういうこと言うとは思わなかった。江藤さんと仲いいんだらう？　もつと彼女に優しくしてあげようとか思わないの？」

この言葉は強烈だった。

(涼が……私よりマユリを庇かばっている)

あの子が弱そうで、守らないといけない対象に見えているのだから。

無意識に奥歯に力が入る。

マユリはそんな弱い女じゃない、と私の直感がそう言っている。

確かに男性関係の悩みは尽きないようだけれど……それでボロボロになっているかというところでもない。

マユリは本命の彼氏を持ちながらも、あらゆる男性の視線を集めていたのだ。奥さんのいる男性でも、恋人のいる男性でも、関係ない。男の視線は全て自分に注がれるべきだという無言のアピールが、マユリから放たれているのだと、私は今、ハッキリ気付いてしまった。

でもそれを涼に言えば、性格の悪い女だと思われてしまいそう。苦しいけれど、これ以上マユリを悪く言ったり涼の心を疑うようなことは口にできなかつた。

涼の本心はあえてハッキリ聞かず、無理やりケーキを食べて自分を誤魔化したけれど……その我慢のせい、この日以降、私は塞ぎがちになっていった。

タイミンが良くというか……私の心のボルテージが下がってきた頃、樋口さんと約束した食事の日になった。

（樋口さんと食事したって、何を話したらいいのかわからないなあ）

断ろうかと直前まで迷ったけれど、気分が滅入ったままアパートに帰るのも嫌だったから、結局彼の指定したレストランに向かった。涼だって、マユリと食事してるんだし、と思つたらやりきれなく思つたのもある。

でも向かつたはいいけれど……その店構えに思わず足が止まった。

「え……こんな高級なお店？」

何度も看板を見るけれど、そこは間違いなく樋口さんが連絡してきたレストランだった。

ちよつと入りにくい感じの高級レストランで、表に出ているメニューも外国語で、私には読めなかつた。料金は、と見ると、コースらしきものには万単位の値段がついている。

「何ポーっと立ってるんだ。先に入っていていいと言つたはずだが」

後ろから声をかけてきたのは、すました顔で私を見ている樋口さんだった。

「だって、こんな高いお店なんて。すごく緊張しちゃいます」

涼が入つた一番高級なお店だって、ここほど高くなかつたと思う。私は店の入口でまごまごしてしまふ。

「オーナーが知り合いなんだ。緊張する必要はない」

そう言つて、樋口さんはそのない仕事で私をエスコートしてくれた。

（女性慣れしてるのかな。すごくスマート）

樋口さんに店の中まで案内され、私はそんな感想を抱いた。会社では堅苦しい上司でしかなかつたのに、こここのころ彼の意外な面が見えてきてちよつと戸惑つてしまふ。

「酒は強いのか？」

「いえ……たしなむ程度です」

「そうか。じゃあワインはグラス一杯にしておこう」

こんな感じで、私の好みも聞きながらメニューを選んでくれた。

ソムリエからワインの説明を聞き、テイステイングというものをやる樋口さんをじっと見る。慣れた調子で「肉に合いそうだ。この赤をグラスで」なんて頼んでいる。

「フルボトルじゃなくていいんですか？」

私にも多少はワインの知識があっただけれど、グラスワインをテイステイングして決める店があるなんて知らなかった。

「ああ、ここはグラスワインからテイステイングをさせてくれて、気に入ったら客の必要な量だけ出してくれるんだ」

「へえ……」

なんだか世界の違う場所にいる感じでくすぐったい。樋口さんと向かい合っていると自分が少し高級な女になった感じがした。

「高い食事ばかりがいいとは思わないが、相澤さんには迷惑かけっぱなしだからな。いつもの苦労を考えると、これくらいの食事をご馳走して当然だろう」

優しく微笑みつつ、テーブルに用意してあった小さな花に視線を落とした。そのままさしに猛烈な色気が宿っていて……私は心臓がドクンと鳴るのを感じた。

「ひ、樋口さんとお食事なんて、なんか不思議な感じですよ」

どもりつつ、そう口にする、彼は私のほうへ視線を上げた。

「そうか？ まあ……会社の連中を誘って食事をしたことなんてないからな。そういう意味では君は俺にとって特殊な女性ってことになるかな」

「特殊？」

冗談でも言ったつもりだろうか。彼の口元が少し緩んだように見えた。

「もっと口説き文句も言えるが、そういうの……君は望んでないだろう」

「!!」

あまりに余裕のある樋口さんの態度、そして、その色気たつぷりなムードに、私は翻弄ほんろうされた。

私に好意があるのかどうか、それすら推し量れない。ただ、彼なりに私を気遣ってくれているのは伝わってきた。だから、その優しさだけを「ありがとうございます」と受け取ることにした。

今、私の心は弱っている。だから樋口さんに本気で口説かれたら崩れてしまうかもしれない。だから彼がここで止めてくれてよかった。樋口さんはそれをわかっているだろうけど。

ともあれ、樋口さんとの食事は美味しくって楽しかった。

「あー、美味しかった。それに、樋口さんと少しお近づきになれて嬉しかったです」

デザートまで平らげたところで、私はそう言っつと自然な笑顔になった。すると、樋口さんが驚いた顔をする。

「……俺と食事をして、多少は楽しい時間を過ごせたか？」

「はい、楽しかったですよ？」

実際、堅苦しいとはかり思っていた樋口さんが案外食通なのがわかったし、映画が好きとか、それなりに趣味があることもわかった。

職場以外の樋口さんを知るの嫌ではなくて、むしろ楽しいことだった。

「俺の一方的な気持ちじゃなくて良かったよ」
「え？」

言葉の意味を問う前に、樋口さんはスツと席を立て、店を出ていく。お会計はもう済ませてあったようで、私は値段もわからないまま高級料理をご馳走になってしまった。

「樋口さん！」

片手をポケットに突っ込んで寒空を見上げている彼を呼んだ。

「……どうしたんだ、大声出して」

「その……。今日はありがとうございました」

ペコンと頭を下げる私を見て、彼はまた優しく微笑んだ。

「礼を言われるほどのことはしてないから気にするな」

「いえ。今日のお返しはいつか、必ず……」

これは私独特の「恩を感じやすい」性格からきた言葉だった。でも言った瞬間、必死で次の約束を取りつけているように聞こえたかもしれないと焦ってしまう。

「相澤さんから食事に誘ってくれるのを、楽しみにしてるよ」

樋口さんはあまり重く捉えていないようで、軽く受け流してくれた。そして、駅までの道を二人でゆつくりと歩いたのだった。

（樋口さん、堅物でケチなんて言って、ごめんさい！）

私は心の中で樋口さんに謝りつつ、今日彼と食事ができて良かったと思った。

少しの間だけでも、現実の悩みを忘れられたから。

ほんの少しだけど、お姫様にでもなったような幸せな時間を過ごせたから。

5 失った心と……

マユリと涼がおかしいかもしれない……という疑惑が浮かんでから二週間ほど経った。

その間にも涼の態度は変化していき、私は少しずつ追いつめられていく。涼は私のアパートを訪ねてきても、決して泊まろうとしなくなった。着替えは何着か置いてあるのに……なんだか一緒に空間にいることを拒絶されているような気がして、私は心を締めつけられた。

『マユちゃんを好きになったの？』

喉元まで出かかった言葉を無理やりのみ込む。でも、いつまで言わずにいられるだろうか。

涼だけは、他の男と違う。浮気とか……絶対できない。あり得ない。

未来だってそう言っていた。

（でも……）

そこまで考えて、私はもつと怖いことを考えた。

（浮気じゃなくて、本気だったら……？）

嘘のつけない涼。